

2012年3月10日
於 南山大学人類学研究所（予定）

南山大学人類学研究所・公開シンポジウム

社会貢献としての博物館活動・文化財行政との格闘

博物館活動や文化財行政は、長引く世界的な不況や増大する財政支出によって、近年、非常に厳しい状況下にある、との指摘が国内外でなされている。実際、国内でも海外でも十分な予算を割く余裕がないため、博物館活動や文化財行政が少なからず存亡の危機に直面している。

それでは博物館活動や文化財行政が担う役割そのものが小さくなったのか、といえば決してそうではない。たとえば、政治的・文化的マイノリティの文化復興や、周辺地域とされる社会の歴史・文化の記録継承など、人類学に関連する課題だけでも枚挙にいとまがないだろう。

しかしながら、上記のような博物館活動や文化財行政の課題や要請に対して、人類学の貢献は残念ながら十分とは言い難かったのが現状である。なかでも、日本の人類学は、「国立民族博物館」という国内に最大規模の博物館機能を備えた研究機関を有しているにもかかわらず、博物館活動や文化財行政におけるプレゼンスは考古学や民俗学などに比較すると非常に小さいと言わざるをえない。実際、今回の東日本大震災による文化財や博物館の窮状に対して、具体的な対策に即座に走った考古学や民俗学などに比べる限り、どうしても人類学の貢献は乏しかったと認めざるをえないだろう。

こうした理由のひとつには、既存の人類学が、博物館展示をめぐる政治性や文化財行政にかかわる権力関係といった問題点を糾弾してきたことがあげられる。すなわち、人類学は、博物館・文化財行政の批判者であって協力者とはなりがたい調査・研究に——その是非は別として結果的に——軸足を置いてきたといえる。

ところで、人類学では、近年にわかに社会貢献の必要性が盛んに叫ばれている。そこでは、調査地の開発援助や人権保護など、いわゆる政治・経済的な課題にかかわる議論が盛んに議論されている。もちろん、こうした議論は、学術的にも社会的にも意義あるものとなるだろう。だが、民族誌的調査・研究に立脚する人類学は、普遍性を志向する立場であれ、個別地域にこだわる場合であれ、他分野から一般社会に至る外部に対して「文化のスペシャリスト」であることを標榜してきた。今後、どのような理論的展開を迎え、またどんな研究対象に取り組んだとしても、人類学は民族誌的調査・研究を支柱とする限り、大勢において「文化のスペシャリスト」であることを放棄することはないだろう。

それが正しいならば、政治・経済的な課題に参加することも重要ではあるが、博物館活動や文化財行政の要請に応えることは、「文化のスペシャリスト」を自認する限り、人類学が果たすべき責務のひとつなのではないだろうか。このような問題意識のもと、本企画では、博物館活動や文化財行政に対して人類学が果たしうる貢献を検討する。とくに、ここでは、海洋文化館の展示リニューアルを事例として、

そこで人類学的な知識や成果が具体的にどのような貢献を果たしうるのか、あるいはこうした経験が人類学にいかなる課題や新たな知見をもたらすか提起する。

なお、本企画の最終的な射程は、単に博物館活動や文化財行政に役立つことではなく、博物館活動や文化財行政を通して果たしうる社会貢献の追究にある。このため、今回の各報告では、海洋文化館の展示に関わるオセアニアや沖縄などの地域社会に対する意義や貢献を積極的に論じて行く。

■プログラム

- ・趣旨説明：13:00～13:05
- ・報告1：13:05～13:35（発表25分質疑5分）
「リセットされる文化財のカテゴリー：フィジーの文化的景観を事例として」
大西秀之（同志社女子大学）
- ・報告2：13:35～14:05（発表25分質疑5分）
「未世界遺産ナン・マドール：持続可能な文化遺産保護に向けて」
石村智（奈良文化財研究所）
- ・報告3：14:05～14:35（発表25分質疑5分）
「展示資料と文化財の間：海洋文化館蔵資料の修復調査を通じて」
角南聡一郎（元興寺文化財研究所）
- ・報告4：14:35～15:05（発表25分質疑5分）
「21世紀の航海カヌー：海洋文化館のカヌー資料修復と製作の意義から」
後藤明（南山大学）

休憩：15:05～15:15

- ・コメント1：15:15～15:30
佐々木史郎（国立民族学博物館副館長）
- ・コメント2：15:30～15:45
大塚達郎（南山大学教授）
- ・総合討論：15:45～16:30